

学校園教育推進サポート事業 報告書

学 番	2705	学校名	小針中学校	校長名	軽部 直幸	作成者名	渡部 智和
学校教育推進サポート担当者名			教頭 渡部 智和			電 話	267-1851

1 実践のテーマ

ポジティブ行動支援をベースとした予防的生徒指導体制の構築

2 テーマ設定の理由

社会の変化に伴い、個々の生徒の状況を適切に把握することが困難になっている。自校を振り返ると、学校評価アンケート等で集団全体の実態把握に努めたり、教員個々による日々の生徒の見取り、教育相談等に取り組んだりしてきたものの、不安要因を抱える生徒個々の状況を客観的に把握する体制が十分ではなかった。そこで、本研究は、COCOLOプランに記載された「エビデンスに基づきケースに応じた対応を可能にするための調査の実施」に係わり、信頼性・妥当性のある尺度を活用し、生徒個々の状況を把握し、その結果を効果的に機能させるための学校体制の在り方を提案するものである。当校がこれまでグループ担任制の取組を通して得た知見を基に、チームで取り組む予防的生徒指導体制を構築する。

3 実践内容

(1) 学校適応感等の把握

・信頼性・妥当性が担保された多様なアセスメントツールを活用した実態把握
 <アセス、コンケアの活用>

(2) 学級経営の実践力向上

・講師を招聘した継続した校内研修の実施、グループ担任の協働による学級経営シートの作成

4 実践計画 (実践の概要) ※WS型→ワークショップ型

実施時期	実施内容
4月	・職員研修① (学級経営) 講師：関根廣志 様
5月	・アセスによる学校適応感調査①
6月	・心の天気予報 (コンケア) 全校導入
7月	・学級経営シートの作成
8月	・職員研修② (学級経営) 講師：関根廣志 様 ※WS型研修 ・職員研修③ (特別支援教育・学級経営) 講師：松井裕美子 様 ・職員研修④ (コンケア) 講師：東京メンタルヘルス 様
9月～12月	・各学級、授業での実践
11月	・職員研修⑤ (生徒指導) ※WS型研修
12月	・アセスによる学校適応感調査② ・学級経営シートの見直し
1月～3月	・成果と課題を整理。次年度計画立案、職員研修⑥

5 結果と考察

(1) 学校・学級適応感の高まり アセスの結果 N=710

全生徒の分散分析の結果を示す。「教師サポート」が有意に上昇した。「生活満足感」「学習的適応」は、有意に下降した。この結果から、ツールを用いたアセスメントをしたことで、研修で得た知見をグループや学年で共有したり、生徒の情報を円滑に行ったりしながら、生徒指導をしてきたことが、生徒が教師からサポートを得られている

項目	6月	12月	検定
生活満足感	55.3	54.5	↓
教師サポート	56.4	57.1	↑
友人サポート	56.4	56.4	→
向社会的スキル	56.3	56.3	→
非侵害的関係	57.9	57.5	→
学習的適応	53.2	51.6	↓
対人的適応	56.9	57.0	→

との結果につながったものと考えられる。取組に一定の効果が見られたものと判断できる。一方で、学習的適応感と生活満足感には相関関係があることは栗原 (2010) からも明らかになっており、今後は学習面での

サポートを充実させていく必要性が示唆された。

(2) 新潟市生活意識調査の結果から

項目	6月	12月	検定
学級や集団のために責任をもって自分の役割を果たしている。	3.38	3.41	→
学校は楽しい。	3.39	3.44	↑
友達やまわりの人に対して思いやりの心をもって接している。	3.58	3.57	→
自分にはよいところがある。	3.12	3.09	→
なりたい自分(私の目標)の達成に向け、努力している。	3.35	3.30	→

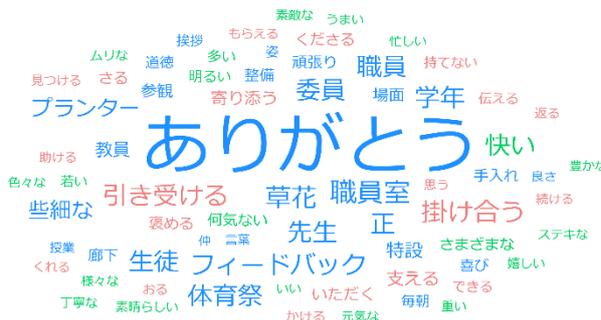
11月に実施する新潟市生活意識調査項目のうち、いくつかを6月にも実施した。その際、あてはまるを「4」、ややあてはまるを「3」、あまりあてはまらないを「2」、あてはまらないを「1」として数値化し、分散分析を行った。結果として、自己肯定感にかかわる「自分によいところがある」の項目については、変化が見られなかった。一方で、「学校は楽しい」という項目は全校生徒で有意に上昇が見られた。要因は様々な考えられるが、先のアセスの結果と併せて考えれば、教師サポートが向上し、友人とのかかわりがよくなった結果、学校は楽しいという数値の向上につながったものと推察できる。

(3) 不登校出現率について

令和6年12月末現在で、30日以上欠席者は38名(R5.3時点で38名)と昨年度とほぼ同数である。内訳をみると、その多くは昨年度からの長期欠席者であり、年度内に長期欠席となった生徒は、10名ほどである。年度内に長期欠席者となった生徒は、昨年とほぼ同数であるものの、校内適応指導教室に登校を再開している生徒も複数おり、今後も経過を注視していく必要がある。コンケアやチーム体制が十分に機能したかどうかは現時点では判断ができない。

(4) 職員集団について

右図は9月に実施した職員アンケートの自由記述をテキストマイニングで分析したものである。記述には「先生方のコミュニケーションが増えてやりやすくなった」「お互いがお互いを支えている感じがする」「職員室が明るくなった」などの記述が複数寄せられている。職員集団の関係性が良好になったことが伺える。



6. まとめ

- アセスや学級経営シート、ワークショップ型の研修を継続して実施したことがグループ担任間のコミュニケーションを促進し、関係性を良好なものにした可能性がある。
- 職員間の関係性がよくなり、一貫した方針で対応したことで、生徒が教師のサポートを感じるようになったと考えられる。
- ▲不登校の出現率までの効果は検証できなかった。次年度以降の課題となる。
- ▲教師サポートの向上と学習的適応感の向上の関係を明らかにする必要がある。

<参考文献>

栗原慎二・井上弥編著 「アセスの使い方・活かし方」ほんの森出版 2010